円仁と『法華経』

酒寄雅志

はじめに

日本における法華信仰は、仏教伝来からほどなくみられ、七世紀の初めに、聖徳太子（五七四～六二二年）が『法華経』を講義し、その注釈書である『法華経義疏』を著した。聖徳太子は、仏の教えに帰依する一切の衆生が救われると説く『法華経』によって、当時、統制の取れていなかった国家の統一を図ろうした。法隆寺金堂の本尊である金銅釈迦三尊像は、『法華経』を典拠に作成されたものといわれる。[1]

さらに八世紀には、『仁王般若経』『金光明経』とともに、『法華経』は護国三部経といわれ、藤原南家（藤原武智麻呂を祖とする）によって書写された『法華経』などが今日に伝わる。[2] そして最澄は、鑑真によって将来された『円頓止観』『法華玄義』『法華文句疏』などの天台三大部を書写し、八〇五年（延暦二十四）に、入唐して天台山に登り、天台教学を学んだ。帰国すると天台宗を開宗し、『法華経』による法華一乗、つまり人間の悟りは声聞（自己の解脱のみを目的として修行する者）、縁覚（自ら道を悟るのみで説法教化しない者）、菩薩（自らのためのみならず一切の人間のた

めに修行している者）が、融合してただ一乗（成仏への道はひとつである）あるのみと説いた。天台宗は、『法華経』を円教（完全なる教え）とするのである。

一、円仁の生い立ちと『法華経』

七八八年（延暦七）、最澄は比叡山に堂を構え、薬師仏を安置して、比叡山寺を建立した（『天台座主記』[3]）。それから六年後の七九四年（延暦十三）、下野国（現在の栃木県）都賀郡の壬生氏の家に男子が誕生した。後に、慈覚大師と謚された円仁（～八六四年没）である。大慈寺の僧で、鑑真和上の第三代の弟子であった広智は、その家の上に紫雲が現れたのを独り見たが、秘して誰にも語らなかった。

『三代実録』（以下『三実』と略す）貞観六年（八六四）正月十四日条の円仁卒伝には、

年甫九歳にして、広智菩薩に付託す。円仁、幼くして警俊、風貌温雅なり。其の兄、外典を以てこれを教える。然も猶心仏道を慕う。嘗て経蔵に登り、誓って観世音経を探り得て、心甚だ歓喜し、遂に俗書を抛うつ。経論を受学し、俄かに諸部に通渉して、大旨を領悟す。

とある。幼くして父を亡くした円仁は、九歳になると兄から儒教を学んだが、経蔵で『観世音経』を見つけて喜び、広智について仏教を学んだ。幼心にも、『妙法蓮華経』巻第八「観世音菩薩普門品第二十五」の、自由自在に変化して、あらゆるものを救う慈悲に満ちた観音菩薩に感動したのであろう。当時、下野国では、東北地方の蝦夷との戦いに兵士が徴発され、軍需物資の供出に苦しむ人々も多く、幼いながらも円仁は心を痛め、その救済に役立つ人間になろうとしたと思われる[4]。これが円仁にとって、『法華経』との最初の出会いであった。

十五歳（八〇八、大同三）になった円仁は、下野国から比叡山に登って最澄に師事し、止観（「摩訶止観」のことで、天台大師智顗が講説した天台宗の実践修行法）を学び、八一四年（弘仁五）に官試に合格して得度した。二十一歳であった。その後、八一六年（弘仁七）に東大寺において具足戒を受け比丘となった。

八一七年（弘仁八）、円仁は最澄に随って『法華経』一千巻を安置するために上野・下野国を訪れた。円仁

は上野国の緑野寺（現在の群馬県藤岡市浄法寺）で、最澄から伝法灌頂（頭頂に水を灌ぎ、正統な継承者とする儀式）を授けられ、さらに下野国の大慈寺では、円頓菩薩大戒（『梵網経』に基づいて戒を受けて比丘を称することができる）を授けられた。

そして円仁は、八二二年（弘仁十三）に、十二年籠山に入った。『妙法蓮華経』巻第五「安楽行品第十四」に、修行者は国王・外道・小乗の徒に近づかず、異性に単独で説法をしないとする身の処し方に従ったものであろう。しかし山外に出ることを懇請されて、八二八年（天長五）に籠山を中止し、法隆寺において『法華経』を講じた。その講筵に列した者は皆、『法華経』の妙義を広く悟ることができ、天台宗の奥旨を全て聞くことができたという。さらに八二九年（天長六）には、天王寺（大阪の四天王寺）で夏中、『法華経』と『仁王経』を講じ、天台宗の弘伝に努めた。

八三〇年（天長七）正月三日、出羽国（現在の秋田県）で、

今日辰の刻、大いに地震い動ぎ、響くこと雷霆の如し。登時、城廓官舎、并びに四天王寺の丈六仏像・四王の堂舎等、皆悉くに顛倒し、城内の屋仆れ、撃死する百姓十五人、支体折損の類、一百余人なり。歴代より以来、未だ曾て聞くこと有らず

（『日本後紀』逸文）。

という未曾有の大震災が起こった。それに加えて、陸奥（現在の福島・宮城県など）・出羽国では、前年以来、疫病が蔓延し、葬儀すら行えないほど凄惨な状況であった。最澄から「忘己利他」（己を忘れて他を利するは慈悲の極みなり。『山家学生式』[5]）を教誡されていた円仁は、「北土」に向かい、病魔に苦しみ、被災した人々の心の救済と、死者の追福をかねて天台の教えを布衍したのであった[6]。

だが八三三年（天長十）に、円仁は大病を患い、比叡山の横川に草庵を結び蟄居すること三年に及んだ。この間、円仁は『妙法蓮華経』全二十八品の写経に専心した。それも一文字書くたびに三回の五体投地（両手・両膝・額を地面に投げ伏して仏を礼拝すること）を繰り返す「一字三礼」を行いながら写経を成し遂げた。実に三年の歳月を費やしたという。この『法華経』を小塔に納め、さらに小堂を建てて首楞厳院と称

した。[7]

二、承和の遣唐使と円仁

1．請益僧円仁

八三四年（承和元）正月九日、三十数年ぶりに遣唐使が任命された。大使に藤原常嗣、副使には小野篁が任ぜられた。比叡山の横川の円仁のもとにも、遣唐請益に選ばれたことが伝えられた。『元亨釈書』円澄伝によれば、

承和四年（八三七年）十月二十六日、弟子慧亮に告げて曰はく、「先師往年に語りて曰はく、『我れ帰朝の時、国清寺の座主・大衆に白して曰はく、本国に帰るの後、常に請益・留学の二僧を遣はし、円教の深旨を請決せん。我滅する後、汝宜しく人を撰び海を跨ぐべし。我が遺命を承けたまわりて門属を顧みるに、未だ其の人を得ず。唯、楞厳院禅師の任に充つべし。故に我此の人の入唐請益を勧め、我が命今夜に在り。此の人を待たざるは深く恨と為すのみ。今、請益大徳に置く所の三十余条の疑問并びに伝法の記草、雑書等を以て、汝に託くす。彼の禅師帰朝を須ちて、必ず諮決を受けよ。是我が懇志なり。

とあって、円澄（七七二～八三七年）は、宗祖最澄から生前に「円教の深旨を請決せん」がために、請益と留学の二僧を唐に派遣することを託されていた。そこで円澄は、楞厳院禅師すなわち円仁を推挙し、「三十余条の疑問」と「伝法の記草、雑書等」を託したのであった。

「三十余条の疑問」は、『唐決集』[8]に「円澄疑問三十問」として収録され、そのなかでは、最澄が唱えた円密一致の根幹に関わる『法華経』と『大日教』との関係を質しており[9]、当時の天台宗が抱えていた密教の問題点の解決を円仁に委ねたのであった[10]。円仁自身も、

承和二年、人有りて来たりて告げて曰く、「頃は朝家遣唐使の議有り。業に随い人を択べり」と。之に居ること幾ばく無くして、夜夢に、先師忽ちに来たりて、大師の膝を枕にして語りて曰く、「吾れ将に汝をして、求法のために入唐せしめんとす」（『慈覚大師伝』[11]）。

と、師の最澄から入唐するように告げられた夢を見て

いる。

今日、「承和の遣唐使」あるいは「最後の遣唐使」など呼ばれるこの遣唐使は、八三六年（承和三）四月二十八日に、仁明天皇から節刀を賜り、ただちに難波に向かった。一行は、四隻の船に分乗して、七月二日に博多津から船出した。しかしほどなく円仁の乗船した第一船は、肥前国に漂着し、第三船は難破して多くの犠牲を出した。そこで八三七年（承和四）七月二十二日、改めて渡海が試みられた。だがまたもや悪天候に阻まれて失敗したのであった。[12]

八三八年（承和五）六月十三日、遣唐使一行は博多津から出港して、三度（みたび）渡海を試みることになった。四十五歳の円仁は、この日から鴻臚館前に到った八四七年（承和十四、五十四歳）九月十八日までの九年六か月余りの期間、在唐巡礼の顛末を記録している。『入唐求法巡礼行記』（以下『行記』と略す）[13]である。

2．渡海と『法華経』

博多津を船出した円仁らの第一船は、出港当初、順風を得られずしばらく海上に停泊したが、六月二十四日、有救島（うくじま）（現在の長崎県宇久島）を経て東シナ海に乗り出した。『行記』には、

> 六月廿四日、第四舶が前に在りて去（ゆ）くを望見せり。第一舶を相去ること卅里許にして、遙か西方に去けり。大使は始めて観音菩薩を画かせたまい、請益、留学法師ら相い共に読経して誓祈せり。

とあるように、第四船を西前方に望みながら追走し、遣唐大使の藤原常嗣は観世音菩薩を描かせ、渡海の平安を祈った。観世音菩薩（観自在菩薩）は、世界のあらゆることを観察することが自在であり、また人々の苦悩を観察し救済することも自在で、さらに救いを求める人々の心に応じて、いつでもどこでも自在に現れることができる。しかも『妙法蓮華経』巻第八「観世音菩薩普門品第二十五」[14]には、

> 或いは巨海に漂流して、竜・魚・諸の鬼の難あらんに、彼の観音の力を念ぜば、波浪も没することの能わざらん。

と、「観音の力を念ずれば、荒れ狂う海中に没することはない」とあることから、常嗣は観音像を描かせようとしたと思われる。請益僧の円仁と留学僧の円載も、

航海の安寧を祈って『観音経』を読経したのであった。

六月二十九日、遣唐第一船は大海原を越え唐へ近づいたものの、波浪に弄ばれて辛苦し、ついに座礁してしまった。大使の常嗣は、乗船していた遣唐使船から小舟に乗り移って陸地を求めた。その時の事情を後に聞いた円仁は、

聞く、大使は六月廿九日未時（十四時）をもって舶を離れたり。以後、漂流の間、風は強く、濤は猛し。船の将に沈まんとするを怕（おそ）れて、碇を捨て、物を擲（なげう）つ、口には観音・妙見を称えて、意に活路を求む。猛風時に止んで、子の時（二十四時）、大江口の南の蘆原の辺に流れ着く。

と、波濤に翻弄されて沈没することを恐れた大使が、碇などを海中に投棄し、観音菩薩と妙見菩薩の名を称えて助けを求めたと書き留めている。

妙見は『七仏八菩薩所説大陀羅尼神呪経（しんじゅ）』[15]によれば、

我れ、北辰菩薩にして、名は妙見という。今、神呪（しんじゅ）を説きて、諸の国土を擁護せんと所欲す。作すところはなはだ奇特なるがゆえに、名は「妙見」と曰ひ、この閻浮提（えんぶだい）（須弥山の周囲にある四つの大陸〈四大洲〉の一つで、贍部州（せんぶしゅう）ともいう）におり、衆星中の最勝にして、神仙中の仙にして、菩薩の大将なり。

とあるように、北辰菩薩であり、国土守護の神であることがわかる。そして北辰菩薩は北の空にあって、不動の星である北極星が神格化され、航海における道標として航海の安全を祈願されたのであった。

日本における妙見菩薩信仰は、『正倉院文書』「仏像彩色料注文」天平勝宝四年（七五二）閏三月十八日類収[16]に、「薬師像壱軀、千手千眼菩薩一軀、妙見菩薩一軀、（中略）、画師一人、単十二日」とあって、八世紀半には妙見菩薩像が画かれており、既に存在していたことが認められる。さらに『日本霊異記』下巻第三十二話には、延暦二年（七八三）八月のこととして、大和国の呉原名妹（くれはらなくはしまる）丸が紀伊国と淡路国の間で海難に遭ったが、妙見に祈念して命を救われた話が載っていて、航海安全を祈願する信仰の対象として妙見菩薩が、観音菩薩とならんで尊ばれていたことがうかがえる。また妙見菩薩を天皇が祀ることが、七九六年（延暦十五）三月から始まっている[17]。三月三日と九月九日の二

度、内裏より北方にある霊場で、北辰に燈を献じ、天皇が北方に向かって遙拝する「御燈」（北辰祭）という年中行事で、北方の霊場には、天台宗の諸寺院が選ばれている。こうした当時の妙見信仰を考慮すると、蔵人頭として、仁明天皇に近侍していた藤原常嗣が、「御燈」に参列した可能性も想定でき、常嗣が観音菩薩とともに妙見菩薩の名号を唱えたことも、そうした経験によったものかもしれない。

幸い観音菩薩や妙見菩薩の加護によって、円仁たちは苦難の末に、七月二日、揚州海陵県白潮鎮桑田郷東梁豊村に着いた。そこで揚州に滞在することになった大使は八月二日、海の中で漂没しそうになった時に発願した妙見菩薩と四王像を、開元寺で描かせようとした。しかし外国人が境内に立ち入ることを許されなかったために断念せざるをえなかった。しかも卜筮によって、忌みある八月四日には、像を画くことを止め、翌年に持ち越すこととなった。

年が明けた八三九年（承和六、開成四）三月一日、長安における使命を終えた大使たちが楚州に戻り、揚州から合流した円仁らと再会した後、日本人の画工三人に、楚州開元寺で、妙見菩薩と四天王像を描かせ、改めて宿願を果たした。そして三月三日の夜になって、大使は開元寺の堂裏で、千盞の燈を点じて、妙見菩薩と四天王を供養した。

便ち重ねて誓わしむらく、去年漂没せんとせし時、更に発願し、陸に到るの日、己が身の高きに准らえて、妙見菩薩十体、薬師仏一体、観世音菩薩一体を画かんと。着岸の後、公事繁多にして、兼ねて旅中に在り、諸事備え難く、修造すること能わず。本国に到るの日、必ず将に前の件の功徳を画造せんと云云。（『行記』八三九年〈承和六、開成四〉三月三日条）

と、昨年、漂没しそうになりながらも上陸できた時に、自分の身長と同じ妙見菩薩十体と薬師仏一体、観世音菩薩一体を描くこと誓った。しかし公務繁多で諸事まならず、画像を作成することができなかったので、帰国を果たしたならば、必ず画像を作ると改めて誓いを立てたのであった。

3．揚州滞在と求法

揚州に滞在していた円仁は、十二月九日に竜興寺の南岳大師慧思と天台大師智顗の像各三幅を、遣唐大使に随行している粟田家継に写し取らせ、翌年正月九日に終わったことを記している。

さらに正月三日、滞在していた開元寺の瑠璃殿の回廊の壁上に描かれている『法華経』を読経する二十人におよぶ和尚の像を描かせたが、すべては写し取れなかった。小野勝年氏は、『法華経』を書写し念誦することによってえた功徳が大きかったことを指摘している。しかも円仁の将来目録から十幀の霊験図をあげ、その一つ「阿蘭若比丘見空中普賢影一張」は、『弘賛法華伝』巻第九（唐の恵祥著）によれば、阿蘭若が『法華経』を読誦すると、六本の牙をもつ白象に騎った普賢菩薩が、合掌供養する姿を見たという説話に基づいて画かれた図であるとする。[18] 普賢菩薩は、『妙法蓮華経』巻第八「普賢菩薩勧発品第二十八」によれば、『法華経』の弘法者を加護する誓いを釈迦に立てていることからも、普賢菩薩像は天台宗にとって特に重要な尊像であったといえる。[19]

一方、円仁は十一月二日に、『維摩関中疏』四巻を四百五十文で買い、翌年正月二十五日には、揚州延光寺の僧恵威から『法花円鏡』三巻を求めている。さらに閏正月二十一日には、嵩山院の全雅から『金剛界諸尊儀軌』など数十巻を借覧している。円仁は、全雅が胎蔵金剛両部の曼荼羅を有し、作壇の法を知っていると書き止めている。『慈覚大師伝』によれば、円仁は全雅から金剛頂の大法を受けており、円仁が密教に関心を持っていたことをうかがわせる。他に悉曇（サンスクリット語を表記するための文字）を長安から揚州に来ていた西明寺の宗叡に学ぶなど、積極的に経論疏や念誦の法を学び、さらには仏舎利を収集した。なかでも最澄が空海に借覧を求めて、決定的な確執を招いた『般若理趣釈経』を入手したことは、さらに円仁が『法華経』のみならず密教にも強い関心をもっていたことを裏付ける。しかしながら円仁の入唐求法の第一の目的は、台州国清寺の師を尋ねて「円澄疑問三十問」などの疑決を得ることであった。だが円仁は国清寺への求法の勅許を得ることができず、遣唐使一行とともに帰国せざるをえなくなった。

何とかして求法の目的を遂げたいと願う円仁は、八三九年（開成四）四月五日、海州東海県東海山付近で、弟子の惟正・惟暁と丁雄満らをともなって遣唐使船を下り、唐への留住を試みた。しかしたちまち楚州に向かう載炭船に乗り込んでいた新羅人に発見され、

僧等は此の絶澗に在って、忽ち斯等に逢うて為す所を知らず。齎す所の随身物乃至食物は惣べて船人に与えて一物も留めず。更に金物ありと謂はば同心は殺害せらるるを恐る。（『行記』承和六年〈開成四、八三九〉）

と、彼らを賊と思った円仁たちは、殺害の恐怖に怯えて、持ち物全てを差し出した。しかも日本人僧であることを見破られて捕えられ、海州近くに碇泊していた遣唐使第二船に乗せられて、再び帰国の途につかざるをえなくなった。

『妙法蓮華経』巻第八「観世音菩薩普門品第二十五」には、

若し三千大千国土に、中に満つる怨賊あらんに、一の商主有りて、諸の商人を将いて重宝を齎持して険しき路を経過せば、その中に一人、この唱言を作さん「諸の善男子よ、恐怖するを得ること勿れ。汝等よ、応当に一心に観世音菩薩の名号を称うべし。この菩薩は能く無畏を以って衆生に施したもう。汝等よ、若し名を称うれば、この怨賊より当に解脱ることを得べし」と。衆の商人は、聞きて倶に声を発げて「南無観世音菩薩」と言わん。その名を称うるが故に、即ち解脱ることを得ん。無尽意よ、観世音菩薩・摩訶薩は、威神の力の巍巍たること、かくの如し。

と、山中で賊に出会ったら観音菩薩の御名を唱えれば、たちまちその災難からまぬがれることができると、現世利益を説いている。円仁たちが観音菩薩の御名を唱えたことを『行記』は記していないが、彼らがこの危難に遭って、心底より「南無観世音菩薩」と唱えたであろうことは想像に難くない。ただ炭運搬の新羅人は、円仁たちを役人に引き渡したものの、新羅人一人に道案内をさせる道心を持ち合わせていたのである。

4．赤山法花院に滞在

遣唐使第二船に乗せられた円仁一行は、四月十日、

再び帰国の途につくことになった。しかしなおも唐に留まることを諦めきれない円仁は、乳山（現在の山東省乳山市）において再び残留を決意したが、ここでも唐の官人の許可が得られず、山東半島の東端に位置する赤山に向かった。

円仁たちは、七月二十三日、遣唐使一行と別れて、新羅人張宝高の建立した赤山法華院に留まることにした。天台山巡礼への執念は変わらなかったが、新羅僧の聖林から五台山が天台山より近く、また志遠・文鑑ら、天台宗の高僧がいることを聞いて、本意を改め赤山法華院において越冬の後、五台山の巡礼を決意した。

赤山滞在中の十一月十六日、『法華経』を読誦・講讃する法華会が行われ、円仁らも参加した。その法会は、

山院は起首に「法花経」を講ず。来年正月十五日を限りて其の期となす、十方の衆僧及び有縁の施主皆来りて会見す。就中、聖琳和尚、是れ経を講ずる法主なり。更に論義二人有り。僧頓証、僧常寂なり。男女の道俗同じく院裏に集い、白日聴講す。夜頭礼懺し、経を聴き次第に及ぶ。僧等其の数冊来の人なり。其の講経・礼懺、皆新羅の風俗に拠る。但し黄昏と寅朝の二時の礼懺は、且て唐風に依る。自余は並びに新羅語の音に依る。其集会の道俗老少尊卑は惣て是れ新羅人なり。但し三僧及び行者一人は日本国人のみ。（『行記』開成四年〈八三九〉十一月十六日条）

とあるように、聖琳（林とも書く）和尚を法主に、翌年の正月十五日まで六十日間にわたって行われた。法華会は、延暦寺でも最澄によって、七九八年（延暦十七）に始修され、八〇一年（延暦二十）からは、一乗止観院で『法華経』八巻および開結二経が講じられ、十一月二十四日に、天台大師（智顗）供が行われていた（霜月会）。さらに延暦寺では、八〇九年（大同四）から御斎会（正月八日から七日間、大極殿で金光明最勝王経講読と吉祥悔過を行い、国家安泰と五穀豊穣を祈願する法会）に準じて、勅使が参向することになっていた。[20] しかも八二三年（弘仁十四）六月の最澄の一周忌に法華十講が行われ、円仁も十三人の講師の一人として参加していたことから、[21] 赤山法華院の法華会に関心を持ったことは想像に難くないが、円仁はその次

第が「新羅の風俗」によっていたことに、特に興味を持ったようである。

5．五台山への巡礼

一冬を赤山法華院で過ごした円仁は、天台山への巡礼を止めて、法華三昧を修して天台の教迹を伝える志遠を五台山に訪ねることとした。

春を迎えた八四〇年（開成五）二月十九日、円仁ら四人は赤山を出発した。旅行許可を求めて文登・登州、さらに青州を経て、慣れない旅に脚の痛みを訴えながら五台山までの二三〇〇余里（一二八八キロ）の道をひたすら歩いた。四月二十八日、文殊師利示現（じげん）の地である五台山頂の一つ中台を遠望した円仁は、感激のあまり落涙している。

円仁一行は、まず竹林寺に入り、五月十六日、大華厳寺の志遠和上を訪ねた。志遠は法華三昧を修して、普賢菩薩と会うことを願っていた。同日、円仁は法賢が「摩訶止観」を講ずるのを見ている。翌十七日に、円仁は志遠に「延暦寺未決三十条」を呈上して決釈を求めたところ、「天台山は已に此の疑を決せり」（『行記』）と言って受け取らなかった。楚州で別れて天台山に向かった留学僧円載に託した「延暦寺未決」に対する天台山禅林寺の広修座主の「決釈」が届けられていたのであった。[22] 同寺で玄亮座主に会った円仁は、「実に五台山大華厳寺は、是天台の流れというべし」（『行記』開成五年〈八四〇〉五月十七日条）と述べており、天台山に行かずとも入唐求法の所期の目的を果たしたのであった。

円仁は、志遠や文鑑から天台の教迹（きょうしゃく）で日本にないものを借りて写している。[23] その数は三十七巻であった。[24]

円仁たちは、五月二十日から五台の巡礼をはじめた。中台・西台・北台を巡り、二十二日には、東台へ向かう途中の上米（しょうべい）普通院で、円仁一人だけが五筋の光明が堂内に入ってくるのを目撃した。さらに六月二十一日にも、大華厳寺の涅槃院で、汾州（現在の山西省臨汾市）の頭陀僧義円とともに「麗しい光明」を見ている。

七月一日、長安に向かって大華厳寺を出立し、その日は金閣寺の堅固菩薩院に宿泊した。翌日には、金閣寺の境内を参拝し、普賢道場の経蔵閣で、紺碧紙に金銀字で書かれ白檀の軸に玉牙をはめ込んだ六千余巻の

大蔵経を見ているが、この経典の形式に則って『法華経』を書写したものが、今日、延暦寺に伝わる「紺紙金銀交書法華経」であるとされている。[25]

南台に到った七月二日、

今南台上にあり。頭陀ら数十人と共に同じく大聖の化現を求むるも、夜に及びて見えず。遂に院に帰りて宿す。（『行記』）

と、文殊師利の示現を期待していたが実現しなかった。果たして、その日の初夜（宵の口で、二十時ころ）に、

台の東に一谷を隔て、嶺上の空中に聖燈の一盞あるを見る。衆人は同じく見て礼拝す。其の燈光初めは大き鉢許の如く、後は漸く大にして小屋の如し。大衆は至心高声に大聖の号を唱える。更に一盞燈ありて、谷に近く現わる。且初めは笠の如く、向後漸く大なり。両燈は相去ること遠く望めば十丈許なり。燈光は焔然たり。直ちに半夜に至り、沒して現れず（『行記』）。

と、円仁たちは「聖燈」を目の当たりにして、文殊師利菩薩の化現を蒙った。文殊師利菩薩は、『妙法蓮華経』巻第一「序品」で、霊鷲山に集まった人々に、これから始まる釈尊の説法を、弥勒菩薩とともに心して聴く気を起こさせるようにしていることからも、『法華経』を深く学ぶ円仁にとって、極めて身近な菩薩であった。歓喜した円仁は、文殊菩薩の冥感があって、このような瑞相が現れたものであるから、帰国したならば文殊閣を造り至心をもって、命つきるまで礼拝することを誓ったのであった（『慈覚大師伝』[26]）。

6．長安での円仁

短い五台山の滞在ではあったが、「求法の大事」[27]を果たした円仁は、一路長安へ向かった。七月四日に、大暦法花寺で法華三昧を修して「六根清浄」を感得した神通和尚の影像並びに所蔵の『法華経』などを見、その後、太原府にしばらく滞在することはあったが、長安までの二千余里（一一二〇キロ）の行程を、五十三日で歩き通した。

八四〇年（開成五）八月二十日に、長安城の春明門外の鎮国寺西禅院に到着し、二十二日に入城した。翌二十三日には、資聖寺に安置され、以後ここに寄住することになった。長安で居を得た円仁は、「師を尋ね

て聴学」（『行記』八月二十三日条）することにしたが、九月五日に、妙見菩薩に念じて、密教に精通した人物を示してくれるように願っている。

その結果、十月二十九日に、大興善寺勅翻経院を訪ねて、元政阿闍梨から金剛界大法を受けた。合わせて金剛界曼荼羅を供養し、伝法の灌頂を受けた。また十二月二十二日には、永昌坊の王恵に功銭六千文で、金剛界曼荼羅四幅を画かせた。曼荼羅は、翌八四一年（会昌元）二月八日に描き終わったが、円仁は、

夜夢を見る。金剛界曼陀羅をえがき本国に到るに、大師（最澄）はその曼陀羅を披きて、はなはだ歓喜をきわむ。（円仁は）大師を礼拝せんとなせしに、大師（最澄）のいいたまうらく、「我あえて汝が礼拝を受けじ、我をして汝をば拝せしめん」と云々。曼陀羅を画き来たれるをば慇懃に歓喜したもう（『行記』開成五年〈八四〇〉十月二十九日条）。

と、師の最澄が金剛界曼陀羅に歓喜する夢を見ている。それは最澄が入唐しながらも、金剛界曼陀羅を入手できなかったことが、常に延暦寺の僧侶にとって負い目となっていたことを物語る。

円仁は、その後も青竜寺の義真から灌頂を受け、はじめて胎蔵毘盧遮那経大法と蘇悉地大法を受法し、また胎蔵界曼荼羅と金剛界九会曼荼羅を画かせている。

かくして円仁の唐における求法は、終わったと言っても過言ではない。そこで円仁は帰国を決意し、八四一年（会昌元）八月七日に、「本国に帰らんがために状を修し」（『行記』）て、功徳使に進めたが認められず、長安に滞在せざるをえなくなった。

この頃から、『行記』の記載は散漫になっていくが、翌八四二年（会昌二）二月二十九日には、玄法寺の法全闍梨のところで初めて胎蔵大法を受け、また同日、大安寺の元簡阿闍梨から悉曇章を学んでいる。これらは最澄の及ばなかった天台宗の密教化の基盤となるものであり、『法華経』の本仏である釈迦如来と、密教の本仏である大日如来（『華厳経』の毘盧遮那仏と同体）の円密一致を、天台宗の旗幟とするところとなったのである。ただ『慈覚大師伝』には、醴泉寺の宗穎から天台の「摩訶止観」を学んだことがみえており、円仁が密教のみならず『法華経』（円教）の修学を決して忘れてはいなかったことがうかがえる。

ともあれ円仁の長安における求法の成果は、『入唐新求聖教目録』[28]によれば、経論・章疏・伝等は四百二十三部五百五十九巻、胎蔵・金剛両部の大曼荼羅と諸尊曼荼羅・壇像、そして道具等二十一種におよんだ。

だが八四二年ごろから、道教に傾倒する武宗（在位八四〇～八四六年）による僧尼の弾圧、つまり「会昌の廃仏」（～八四六年三月）が熾烈となった。しかも長安城内では、相次いで火災や殺人が起こり、また北方の遊牧民族である廻鶻が、唐の国境を越えて侵入するなど世の中は騒然としていた。そうした最中、弟子の惟暁が八か月ほど病に伏して、八四三年（会昌三）七月二十五日に、三十二歳を一期に死亡した。入唐以来五年、異国の地で苦楽をともにしてきた弟子の死を、円仁は「深く愍み」（『慈覚大師伝』）と書き記している。

僧尼に対す弾圧は、一層拍車がかかり、還俗を強制して本貫に帰らせることになった。当初、外国人僧は例外であったが、八四五年（会昌五）五月十三日、外国人の僧侶三十九人は祠部牒のないことを理由に、強制的に還俗させられて帰国を命じられた。円仁らも俗人となって公験（旅行証明書）の発給を受け、帰国することになった。円仁にとっては、「今は、僧尼還俗の難に因り、方に帰国するを得るに、一度は悲しみ、一度は喜ぶ」（『行記』会昌五年五月十四条）と、複雑な心情を吐露している。

三、帰国後の円仁と『法華経』

長安を出た円仁たちは、鄭州・揚州・楚州、さらに赤山を経て、苦難の末に八四八年（承和十五）三月に、比叡山に帰山した。それは山を下りてから十三年ぶりのことであった。まず先師最澄の聖跡に礼拝し、雲霞のごとく集まった僧徒に迎えられた。円仁を取り囲む衆僧は、雨のごとく涙を流して、その帰山を喜び、円仁が唐から将来した諸尊の曼荼羅や真言の儀軌（典籍）を見たのであった（『慈覚大師伝』）。

さらに最澄が唐から伝えた法華懺法を、円仁は改めて伝えた。法華懺法は、天台大師智顗が行者のために制定した法華三昧を修する儀式作法であるが、『妙法蓮華経』巻第八「普賢菩薩勧発品第二十八」と、それを補った『普賢菩薩行法経』を読誦して、罪障を懺悔し、後生善所を願うもの[29]で、天台宗の重要な法要の一

つとなっている。

同年（六月に嘉祥元に改年）七月、内供奉十禅師に任ぜられた円仁は、九月に横川の首楞厳院に根本中堂を創建して、聖観世音菩薩像（重要文化財）と毘沙門天像を祀った。

『山門堂舎記』[30]によれば、

慈覚大師、（中略）本朝に帰るの刻、忽ち海中において波濤の難に値う。悪風、冷たく吹き乗船没せんとするなり。是に大師、願念して云はく、「今、此の伝法、我が朝に弘めんと欲するとてへり。偏に鎮護国家のためにして、偏に利益将来のためなり。悲しきかな此の願を遂げず、海中の命平々を祈請の間、毘沙門天忽ち船上に現はるなり。風止み波静かにして安穏として帰朝し畢はる。其の後、楞厳院の峰に還へり、三古の中尾を占め、竜衆の口上を点ず。精舎を建立して観音を安置するなり。思うに海中に現れる所の毘沙門を造顕して観音の脇に安置するなり。所謂是れ中堂なり。

と、円仁が唐からの帰国に際して遣唐船が嵐にあったため、観世音菩薩に念じたところ、毘沙門天が出現して風波が止み、無事に帰国を果たせたことにより建立したと伝える。

また『叡岳要記』巻下[31]の首楞厳院の条にも、

右は慈覚大師（円仁）入唐求法の後、解纜舶を浮かべるの間、忽ち悪風の難に遇い南海に没せんとす。彼の観音の力を念ずるに、毘沙門の身現る。即便ち彼の像を図画するに、風は晴れ波は平らかなり。須臾にして彼岸に着す。帰山の後、一宇を建立して、観音と毘沙門像を安置す。海上の願に依る。果遂せらる所なり。（中略）嘉祥元年九月、一堂を建立して、天像を図絵し、更に木像と聖観音像を造り移して共に安置すと云々。

とあって、唐からの帰国の途次、悪風に遭い漂没しそうになった際、観音の力を念ずると毘沙門天が現れ、風は止み波は穏やかになったという。そこで八四八年（嘉祥元）九月に、横川の首楞厳院に根本観音堂を建立して毘沙門天の画像を安置したが、後に木像にかえ、聖観音像とともに安置したという。

さらに円仁は、八五〇年（嘉祥三）二月十五日に、仁明天皇の快癒を祈って、文殊八字法を修した

（『阿娑縛抄』引用『扶桑略記』逸文）。文殊八字法は八字文殊法ともいい、密教で文殊菩薩を本尊として八字の真言をもって息災を祈願する修法で、「疫病危厄の時、これを修すべし」と言われる。しかし円仁の祈りもむなしく、仁明天皇は崩御した。四月十七日、文徳天皇が即位すると藤原良相の要請もあって、円仁は「新密法」（『顕揚大戒』）である熾盛光仏頂の修法を行い、全ての災難を除き国家の安全を祈った。これを機に、八五一年（仁寿元）、真言秘法勤修の道場として唐長安の青竜寺に建てられた皇帝本命道場に倣って惣持院を比叡山に建立することとなった。

また円仁によって初めて伝えられた『蘇悉地経』（『入唐新求聖教目録』には、『蘇悉地并蘇摩呼経梵本』一巻〈両部二巻〉と見える）は、他の経典の法では成就しないときに、この経の根本真言を誦持せば、まさに速やかに成就とされる。八五〇年（嘉承三）十二月には、それまでの止観業（『法華経』による天台の教理と実践）・遮那業（『大日教』による真言密教）の年分度者二人に加えて、『金剛頂経』と『蘇悉地経』それぞれの業を学ぶ二人を賜った[32]。以後、胎蔵・金剛両大部に蘇悉地部を加えて台密の三部大法となり、台密の基礎が築かれた。

円仁は帰国後、密教の道場として惣持院を建立したが、八五三年（仁寿三）には、胎蔵界の五仏と『法華経』一千部を納める多宝塔を建てて、法華惣持院を創建した。最澄が日本の六か所に宝塔を建てることを発願しながらも未完成に終わったため、その遺思をついだものであった。それは遮那業の道場であり、止観業の根本道場である一乗止観院（根本中堂）とともに、比叡山内に円密一致の思想を具現した道場が整ったのである[33]。

惣持院を造営することとなった八五一年（仁寿元）に、円仁は唐の法照（唐の浄土教の僧）が始めた五会念仏の流れをくむ五台山念仏三昧法を比叡山でも始め、常行三昧を修した（『顕揚大戒』）。五会念仏は、五種の音声からなる音楽的な称名念仏で、四種三昧の一つである常行三昧は「不断念仏」といわれ、九十日間、阿弥陀如来のまわりを行道しつつ『阿弥陀経』を誦し、常に想いを阿弥陀仏に懸けることによって、罪障を除滅しようとする法会であった[34]。円仁が入滅した

翌年の八六五年（貞観七）には、延暦寺で「不断念仏」が始行され、「山の念仏」として、八月十一日から七日間行われるようになった。

八五四年（仁寿四）七月十六日、第三世の天台座主となった円仁は、五台山竹林寺の風に倣って、浄土院廟供を行った（『顕揚大戒』）。『行記』によれば、円仁は八四〇年（開成五）五月一日に五台山竹林寺を訪れ、同五日には「竹林寺斎礼仏式」に参加している。具体的に竹林寺のどのような「斎礼仏式」を浄土院の廟供に取り入れたかは不明であるが、現在、浄土院で行われている法儀は、御影供と長講会の二つのみであるという。

次いで八六〇年（貞観二）四月[35]に、円仁が初めて「仏舎利会」を行ったことが、『顕揚大戒』にみえている。円仁は入唐中、五台山の大華厳寺や太原府近くの石門寺において仏舎利を見、また長安の資聖寺でも、八四〇年（開成五）九月六日に、懐慶の持参した仏舎利を礼拝している。さらに八四五年（会昌五）五月十五日に、逓送されて帰国することになった円仁は、河南の登封法王寺で釈迦舎利を秘匿する経緯を記した「釈迦舎利蔵誌」を染筆するなど[36]、仏舎利に関心を示している。円仁自身、仏舎利五粒（菩薩舎利三粒と辟支仏舎利二粒を白蠟小合子に盛る）を将来している（『日本国承和五年入唐求法目録』[37]『入唐新求聖教目録』）。『今昔物語』には、惣持院で唐から持ち帰った仏舎利の供養が、八六〇年（貞観二）に始まったとする[38]。

また同年、円仁は文殊菩薩楼の創建を奏上し、詔があって造料を給わった。翌八六一年（貞観三）には、五台山の霊石を壇の五方に埋め、文殊楼の建設を始めた。六月七日、文殊の尊像を造り、五台山の香木を体内に納め、十月二十六日に周旋供養を行った。文殊菩薩を五台山から比叡山に勧請したのであった[39]。

円仁は、長安で『法華経』にもとづく二仏並座（釈迦と多宝仏が並坐）の多宝塔を中心にした絵画で、法華経法とよばれる密教の修法の本尊として画がいた「法華曼荼羅」を取得していたことが、『入唐新求聖教目録』に「法華曼荼羅位様」とあることから知られる。また唐に留住することを決めた八三九年（開成四、承和六）四月に、遣唐第八船の船頭伴須賀雄に託した揚州で得た経典や曼荼羅などの目録である『慈覚大師在

唐送進録』にも、「法華曼荼羅位様一張」がみえる。その図柄は密教特有の画面構成になっていたと思われる。[40]

八六四年正月十四日、円仁が七十一歳で入滅した。生前、入唐求法で多大な加護を受けた赤山法華院の赤山明神を祀ることを念願しながらも果たせないままであった。円仁の遺志は、第四世座主の安慧（あんね）（七九五～八六六年）によって、京都に赤山禅院（現在の京都市左京区）が建立されて実現した。

さらに八六六年（貞観八）七月、宗祖最澄に「伝教」、円仁に「慈覚」の大師号が清和天皇（在位八五〇～八八一年）から贈られ、日本における大師号賜与の嚆矢となった。円仁が天台宗はもとより、日本仏教界の発展に寄与したことを評価された証であった。

おわりに

幼いときから『法華経』に親しんだ円仁は、渡海に際しても『法華経』の加護により無事に唐へたどり着いた。

天台宗は、宗祖最澄以来、法華一乗であるとする立場を取りつつも、『法華経』の本尊である久遠実成（釈迦は永遠の昔に悟りを開き、人々の教化につくしたこと）の釈迦如来と、密教の本尊である大日如来の関係を整合的に理解することが、円仁に託された重要な課題であった。

長安で元政から金剛界の大法を受け、法全・宗頴からも密教の本尊である大日如来と釈迦如来は本来一体であるという「円密一致」の考え方を教示され、さらに、元政から全ての仏の教えは密教に他ならず、他の教えはないとする「一大円教」の教判を受け、[41]帰国後に、『金剛頂経疏』（こんごうちょうきょうそ）や『蘇悉地経疏』を執筆して、法華（円教）と真言（密教）が同等であると説いた。[42]

円仁は、最澄がなしえなかった天台宗の密教化を推し進め、その後、円珍（智証大師、八一四～八九一年）と安然（あんねん）（八四一？～九一五年？）によって大成される台密の基礎を築いたのであった。

慈覚大師円仁は、「およそ仏法の東流することは、なかばこれ大師（円仁・慈覚大師）の力なり」（慶滋保胤（よししげやすたね）〈？～一〇〇二〉『日本往生極楽記』[43]）と、後世、讃えられた。

注

（1）『図説日本仏教の世界3　法華経の真理』（集英社、一九八九年）。
（2）重要文化財『法華経巻第五　藤南家経』（五島美術館蔵）。
（3）『続群書類従』第四輯下補任部（続群書類従完成会、一九五八年）。
（4）佐伯有清『円仁』（吉川弘文館、一九八九年）。
（5）安藤俊雄・薗田香融校注『日本思想体系4　最澄』（岩波書店、一九七四年）。
（6）齊藤圓眞「出羽国大地震に駆け付けた円仁」（『慈覚大師円仁と行くゆかりの古寺巡礼』ダイヤモンド社、二〇一二年）。
（7）影山春樹「円仁の根本如法経と横川の発達」（『慈覚大師研究』天台学会、一九六四年）。
（8）国立国会図書館デジタルコレクション（寛永三年〈一六二六年〉、西北尾覚任房、山門西塔浄国院蔵本）。
（9）仲尾俊博「円澄疑問」（『日本初期天台の研究』永田文昌堂、一九七三年）。
（10）「『唐決』―『広修決答』と『維蠲決答』の比較研究（一）（二）」（『唐決』―日本における天台教学受容過程の研究―研究会、『大正大学綜合佛教研究所年報』36、二〇一四年三月、『同年報』37、二〇一五年三月）。小南沙月「円仁将来目録の研究―『日本国承和五年入唐求法目録』と『慈覚大師在唐送進録』の成立過程―」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要 史学編』第十四号、二〇一五年三月）。
（11）以下、引用する『慈覚大師伝』は、佐伯有清『慈覚大師伝の研究』（吉川弘文館、一九八六年）による。
（12）酒寄雅志「遣唐使の航路」（『栃木史学』第二十八号、二〇一四年）で、この「承和の遣唐使」についても論じたが、遣唐使派遣直前に、紀三津が新羅に派遣された時の外交上のやりとりをめぐる『続日本後紀』の史料解説を書いた部分は（P65上段19行目以下）、佐伯有清氏の『最後の遣唐使』（講談社）を引用したが、その旨を記すことを失念した。拙稿は十年ほど前に執筆した未定稿を大幅に改稿をしたものだが、その際、参考として書き込んだ文章をそのままにしてしまった。ここに記してお詫びする。
（13）以下、引用する『行記』は、足立喜六訳注・塩入良

道補注『入唐求法巡礼行記』全二巻（平凡社、一九七〇、八五年）、ならびに小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究』全四巻（法蔵館、一九八九年）を参考に、一部書き直した。

(14) 以下、引用する『法華経』は、坂本幸男・岩本裕訳注『法華経　上・中・下』（岩波書店、一九六四・六二・六七年）による。

(15) 『大正新脩大蔵経』密教部（四）第21巻No1332（大正新脩大蔵経刊行会、一九六八年）。

(16) 『大日本古文書』十二、二五六～二五七ページ、『正倉院文書』續修別集三十四裏。

(17) 林温『妙見菩薩と星曼荼羅』（『日本の美術』No.377、至文堂、一九九七年）。

(18) 小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究』第四巻（法蔵館、一九六九年）。

(19) 救仁郷「68国宝　普賢菩薩像　一幅」の解説（『天台宗開宗一二〇〇年記念　最澄と天台の国宝』読売新聞社、二〇〇五年）。

(20) 山折哲雄編著『仏教用語の基礎知識』角川学芸出版、二〇〇〇年）。

(21) 『叡山大師伝』（『続群書類従』第八輯下伝部）。

(22) 仲尾・注（9）前掲論文。

(23) 『行記』開成五年（八四〇）五月二十三日条。

(24) 『慈覚大師伝』、『行記』開元五年五月二十九日条。

(25) 政次浩「紺紙金銀交書法華経」解説56（『慈覚大師円仁とその名宝』、NHKプロモーション、二〇〇七年）。

(26) 佐伯・注（11）前掲書。

(27) 『類聚三代格』巻二修法灌頂事の貞観十八年（八七六）六月十五日付「太政官符」。

(28) 『大正新脩大蔵経』目録部　第55巻No2167（大正新脩大蔵経刊行会、一九七七年）。

(29) 多田孝正「五台山仏教と『例時作法』」（『塩入良道先生追悼論文集　天台思想と東アジア文化の研究』山喜房佛書林、一九九一年）。

(30) 『山門堂舎記』は、十四世紀に成立した比叡山延暦寺の堂塔の成立・由来や沿革、諸高僧の略伝や事蹟、寺の儀式などを記述し、撰者は不明である（『群書類従』第二十四輯、続群書類従完成会、一九三二年所収）。